

理想の出会い~THE  
IDOLM@STER~

まちゆもと

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ただアイマスのキャラとの出会いを妄想して書くだけです。

短編集的なものにしたと思います。

# 目次

天海春香との出会い	1
如月千早との出会い	5
星井美希との出会い	10
萩原雪歩との出会い	16



# 天海春香との出会い

階段を駆け上がる音、あつ、と言う声、毎朝の事だが騒がしく起こしてくれるものだ。  
「今日もかぁ…」

俺と春香はいわゆる幼なじみで、家も近所で小中高と同じ学校に通っている。

毎朝起こしに来るのは小学生からの習慣というものだが、春香がきちんと部屋の中で起こしてくれることは月に一度あるかないかくらいだ。

「今起きるよー、大丈夫?!」

「えへへ、大丈夫大丈夫。またやっちゃった」

相変わらず怪我なく転ぶその芸当に感心させられる。

「気をつけろよー。なんてったってお前はもうアイドルなんだからな」

「そうだよね…、しつかりしなきゃだね…」

よし、明日からはもう転ばないもん!

「はいはい明日はね。じゃあ行こうか。放課後今日事務所顔出すんだっけ?」

春香は765プロという芸能事務所アイドルをやっている。

まだあまり仕事はないらしいがレッスンが入ることもあり、よく放課後に顔を出して

いる。

「そうそう！あー早くデビューしたいなあ、ライブとかCDとか！やりたいこといっぱいあるもんね」

「そうだな、応援してる。」

そろそろ準備できたから行こうか」

アイドルになっても昔からの関係は変わらず、一緒にいる時間も変わらない。

もうちよつと売れてくれてもいいんだけどなあとは本人には言えないが。

「そういうえばプロデューサーさんが初仕事取ってきてくれてね！放課後打ち合わせなんだ！なんの仕事なんだろう？たのしみだね！」

「おお、やつと初仕事なんだな！！」

絶対見に行くよ」

「ありがとう！」

|||||放課後事務所にて|||||

「なんで俺も連れてくるんだよ…」

すこし苛立ちながら耳打ちをした。

春香に強引に事務所まで引きずりこまれたのだ。

「だって、プロデューサーさんが是非って…」

普通はアイドルのスキヤンダルを気にするものじゃないだろうか。

「ああ、お待たせしてすまないね。」

君が〇〇くんだね、春香から話は聞いてるよ」

眼鏡の優しそうな男性に声をかけられた、おそらく彼がプロデューサーだろう。

「あの、話って何でしょうか?？」

「しまった。まだ何も説明してなかったね。もし君がよければなんだが、うちでバイトしてみないかい?」

バイト・・・? 芸能事務所で・・・?

「もう、ダメじゃないですかプロデューサーさん。ごめんね、混乱しちゃうわよね。」

春香ちゃんと高校も一緒って聞いてマネージャーのサブ、みたいな仕事をお願いできないかって話になってたのよ。」

緑色の服を着た事務員さんがお茶を出しながら説明してくれた。

「やりませう。やらせて下さい」

もちろん断るなんてしない。春香のためだから。

「そう言ってくれると思ってたよ。よろしくな、マネージャーくん」

＝＝＝＝帰りの電車にて＝＝＝＝

「なんで引き受けたの?」

不思議そうに春香が聞いてくる。

「そりゃもちろん。待遇も良さそうだし、なによりお前がアイドルとして成功するためならな」

「へへへ、そっか。ありがとね」

春香は一瞬驚いたあと、またいつもの笑顔に戻った。

俺は本当の理由をまだ言わないでおこうと思った。

「まあ、お前には俺がいないとだからな」

俺にはお前がいないとただけだな。

未来のマネージャーくんEND



## 如月千早との出会い

ふと、街頭の大型モニターを見ると見知った顔が映っていた。

僕は全くその人のことを知らなかったし、その人も全く僕のことを知らないのだろ  
う。

アイドル、如月千早との出会いと僕の初恋の終わりについて少し思い出してみよう。

|||||回想|||||

「つしやいませエー」

僕はコンビニ店員だった。

気だるげな挨拶、誰のためでもなくただ機会作業のように行う声出し作業。

普段は自分を気に求めない相手の買い物にさして興味もなかったのに、なぜか彼女の  
買っているものが気になった。

「これください」

たったそれだけだったが、とても綺麗な声だと思った。

同時に若く綺麗な女性が物憂げな表情でカロリーメイトとゼリー飲料だけを買って

いくことにすこし残念な気持ちになった。

「以上でよろしかったですか？」

普段なら確認しないようなことだったが、自然と口をついて出たことを覚えている。

「ええ」

愛想も素っ気もない。

残念な美人という言葉が浮かんだ。

それから彼女は定期的にこのコンビニを訪れ、何度も同じような栄養食と、時々サプリメントを購入していった。

代わり映えのしない僕の生活で、この綺麗な女性を目にするのが楽しみであったことには間違いないのだが。

|||||別の日|||||

三ヶ月ほど経ち、初めて彼女は誰かと連れ立って買い物に来た。

「ごめんね、千早ちゃん。遅くなっちゃって」

「いいのよ春香、気にしないで」

頭の二つのリボンが笑うと同時に揺れる可愛らしい元気な女の子だった。

僕は彼女が友達といるのを初めて見た。

それに、なんというか、彼女とはすこし毛色の違う、予想外な女の子だったことが印

象に残っている。

この日初めて彼女が笑っているのを見たのだったか。

そういえば名前を知ったのもこの日だった。

「えー！千早ちゃんそれだけなの!?もつとちゃんと食べなきゃ体に悪いよ！」

レジ前で会話。

僕はその通りだ、もつと言ってやれと心の中からリボンの子を応援した。

「これでも必要な栄養素は取れているから大丈夫よ」

彼女はもう少し自分に気を回してもいいのではなからうか。

|||||別の日|||||

ここ最近、彼女はあまりうちのコンビニを利用しなくなってきた。

買うものもこれまでの栄養食品などではなく飲み物などで、少しずつ食生活に気をつ

けるようになったのだとすこし嬉しく思っている。

なにより驚いたことに、彼女はアイドルであるらしい。

一人暮らしのテレビをつけたときに見知った顔が出ていたのだ。驚きで数分間固

まってしまった。

それ以来僕は如月千早の一人のファンとして陰ながら応援している。

僕はその日の週刊誌ではからずも彼女の知られたくない過去を少し知ることができてしまい、彼女を見るのがテレビでもこのコンビニでも出来なくなってしまったのだが。

「凄惨すぎる過去。弟を見殺し」

ゴシップ週刊誌で発表された衝撃的な過去は、彼女の歌を奪った。

僕には彼女の気持ちを探察することもできない。

それが酷く無力で、悔しかった。

＝＝＝＝別の日＝＝＝＝

「765プロの歌姫復帰する」

あの忌まわしい週刊誌以来、テレビ、新聞、週刊誌を毎日チェックしていた。

「ようやくか…」

彼女が何かを乗り越えたことを知った。

その数日後、彼女が他のアイドルとともにうちのコンビニに訪れた。

「千早さん、戻ってきてくれて本当によかったです。うっうー！」

「本当よ。この伊織ちゃんに心配かけてくれちゃって」

「本当にごめんさい。でももう大丈夫よ」

「そうか、もう大丈夫なのか。」

本当に、本当によかった。

この日が僕の如月千早と最後に会った日である。

|| || || || 回想終了 || || || ||

彼女はおそらく辛い思い出を乗り越えたのだろう。

仲間とともになんとかやって行こうと決意したのだろう。

僕はコンビニのバイトをやめた。

僕は如月千早に失恋した。

もちろん告白なんかしていない。

久しぶりに会った彼女は紛れもなくアイドルだった。

輝いていた。

僕は彼女のファンであることを心に刻んだ。

僕は学校に戻った。

久しぶりの制服姿はなにかすぐたくて、それでも僕も乗り越えなければいけない何かの前に立ったことを実感できた。

人知れずちーちゃんを応援END

## 星井美希との出会い

「なあ母さん、なにかすることあるかい？」

「いえもう大丈夫ですよ。お散歩にでも行つてらしたらどうですか？」

つい先日、四十余年務めあげた会社から定年退職した。

老後の余生を楽しみに生きてきたつもりだったが、退職してみれば家事はいつも通り妻がするし、大学にやつとこき行かせた一人息子は帰つてきやしない。

はつきり言つて暇なのだ。

特にこれと言つた趣味を持っているわけでもなく、仕事をしては家に帰りというルーティンが崩れてしまった今では何をしてもいいかもわからない。

再雇用してもらうほど働く事が好きでもなければ暮らし向きもそれなりに裕福であると自負している。

「じゃあちよつと公園にでも言つてくるかな」

「はいはい、いつてらっしゃい」

することがないのに公園に行くなんて初めてのことじゃないだろうか。

|||||公園にて|||||

家から歩いて10分の公園はそこそこ広く、遊具のある公園ではなく自然公園のような場所だ。

もう私も還暦を過ぎて体力もない。

公園に来るまでに歩き疲れた私は池の辺のベンチに座り込んだ。

「おじさん、大丈夫なの？」

「すつごく汗かいてるよ」

「あ、ああ、大丈夫だよ。」

「少し疲れてしまっただけ」

金色の髪の異人さんのような綺麗な女の子に声をかけられた。

「それは大変なの。」

「ミキ、ちよつとお茶を買ってきてあげるね」

「私は今どき珍しく優しい女の子だなと思った。」

「犬も歩けば棒に当たる、なんてことわざを思い、少し嬉しく思う。」

「はい、おじさん。これあげるね」

「いやいや悪いよ」

若い子に奢ってもらうのはしのびなく、千円札を取り出した。

「いいのいいの。ミキもちょうど喉が乾いていただけなの」

「ミキちゃんていうのかい？ありがとうございますね。」

それにしても公園で何をしているんだい？」

「カモ先生を見てるの」

カモ先生とな。

「ええと、あそこの鴨のことかい？」

「そうなの。カモ先生なの」

不思議な子だ。

「おーい、ミキー！」

真面目そうな眼鏡の男性がミキちゃんを呼んでいる。

「あ、プロデューサー！どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないぞ。もう今回の収録の楽屋入りしてないといけない時間だろう」

「あ、ほんとだ！行かないとなの。」

おじさんまたね!!」

ミキちゃんは。パタパタと、眼鏡の彼は私に頭を下げたあと走ってどこかへ向かった。



|| || || 別の日 || || ||

私はその後も公園に行くようになった。

毎日ではないが公園をよく利用しているひともいるらしく、何人かとは顔見知りになった。

ミキちゃんもたまに鴨を見に来ているようで、よく喋りよく笑う彼女は人気者だった。

「ミキはね、アイドルなんだよ」

「アイドル？」

「うーん、キラキラなの！」

そりや確かにその通りだとも。

そんな会話をしたときは、ミキちゃんがテレビで見かける本当のアイドルだなんて思いもなかった。

|| || || 別の日 || || ||

ある時からミキちゃんはあまり公園に来なくなり、来たとしてもサングラスや帽子をかけるようになった。

病気をしたのだろうかと心配していたのだが、全く杞憂であつたらしい。

「ミキはいま売れっ子、だからね！」

あんまり時間がないの!」

家に帰って母さんがつけているテレビを何の気なしに見上げたとき、ミキちゃんが映っていて腰を抜かした。

「あらお父さんどうされたの?」

「その子を知っているか?」

「ああ、星井美希ちゃんでしょう?」

765プロという所のアイドルさんなんですって」

アイドル。キラキラ。確かにその通りだとも。

テレビで見る彼女は一層輝いていた。

|||||別の日|||||

765プロオールスターライブ。

「でもびっくりしたな、親父がこういうのに興味があつたなんて」

息子と久しぶりに二人で出かけていた。

パンフレットでミキちゃんを探す、やっぱりいつも通りキラキラしている。

私は息子に笑って言ってやった。

「アイドルはキラキラなんだぞ」

アイドルはキラキラ  
E  
N  
D

## 萩原雪歩との出会い

天に星 地に花 人に愛。

誰か昔の偉い人が言ったのだったか。

僕は本当に幸運だ、まさにその言葉を絵に書いたような美しい光景を見られたのだから。

ただ、天には星より明るい未確認飛行物体と、地には花を避けるように突き立てられたスコップがある。

なにより僕の愛した女の子は泡を吹いて倒れているのだ。

星を見に行こうかなんて、言わなければよかったのだ。

|| || || || || || || || || ||

公園の砂場をスコップで掘り返すとひんやりとした黒っぽい砂が露わになる。

僕はその手をつまみ込むのが好きだった。

暑い夏の日、日に焼けて土煙を上げる黄色の地面を見ながら、優越感に浸るのがたま

らなく贅沢な気がして好きだった。

僕は毎日公園に行った。

ある日、白いワンピースと白いつば広帽子に身を包んだ女の子と紺色の着物を着たガタイのいい男が公園に入ってきた。

少女は砂場の僕に目を止めると手を振り、ひとことふたこと何かを男に話すと僕の方へ駆けてきた。

「一緒に遊んでもいい?」

「ごよ」

僕はあまり話をするのが得意な方ではなかったし、彼女もそのようで、ふたりして黙々と穴を掘っていた。

時折僕が手を止め砂の湿り気を手のひらで味わっていると、彼女も真似をして砂を触った。

その日はもうさようならのひと言しか言葉を交わさなかった。

次の日からも、彼女は毎日公園に来て僕と一緒に砂場をほじくりかえしていった。

相変わらず僕らにこれと言った会話はなかった。

|||||

彼女と初めて会ってから二週間ほど経ったころ、彼女は初めて一人で公園に来た。

僕はいつもなぜか圧力を感じていたあの男のことが気になった。

「あの、いつも一緒に来てる人は？」

彼女は話しかけられたことに心底驚いたようで、答えを探して周りを見回すように首を振った。

「ええと、お父さんのことかな？」

今日は一日お仕事があるから…」

「そうだったんだ。あんまり似てないね」

「そ、そうかな？うちの若い人達はお父さんによく似てるっていつてるんだけどな…」

僕には触れれば折れてしまいそうなこの女の子とあの男とは全く似ても似つかないように思えるのだが。

「アイス食べに行かない？暑いし」

ズボンの後ろポケットにある百円玉3枚を確認し直して誘ってみた。

今日は彼女ともう少し一緒に居たい気分だった。

「うん、よ」

後の会話はよく覚えていない。

照りつける太陽が暑くて口の端に付いたアイスクリームがバニラの甘ったるい匂いを長いこと鼻に届けたことと、白い帽子の下の笑顔が陰になっていたのに眩しかったこ

とは鮮明に覚えてゐる。

|||||

それ以来僕達は砂場を掘り返しながらよく話すようになった。

彼女の名前は萩原雪歩、隣の小学校の同学年らしい。

同じ学校だったらよかつたのと言うと、彼女は笑いながらそうだねと言つた。

ほかにも取り留めもないことをたくさん話した。

僕は少し、砂場の外の雪歩が気になつた。

「あのさ、今度神社でお祭りがあるから、一緒に行かない？」

彼女は少し驚いた様子で、それから、

「ちよつと待つてて」

と言つてお父さんの方へ歩いていった。

また歩いて砂場まで帰つてくると、

「いいつて。一緒に行けるよ」

「うん」

他に何を言つていいかわからず、手を冷えた砂に突つ込んだ。

|||||

空が橙と紫のちょうど中間の色をしている。

昼の熱を吸ったアスファルトがむしむしとサンダルを焙り、僕を居心地悪くさせる。

小さい石ころを排水口に蹴飛ばし、神社の階段横の石垣を指でなぞる。

「まだかな」

「おまたせ」

誰かわからなかった。

彼女がああ白いつば広帽子を被っていないのだ。

加えていつもの白いワンピースでなく、紺色に花柄の浴衣を着ていた。

「… おう、いこうか」

詰まらずに言えただろうか。

「あ、りんご飴食べたいな」

「じゃあ俺もその小さいやつ食べよう」

二人で座って食べた。

彼女が食べているのを横で見るといいいなあ。なんて。

人がまばらになり、屋台が完売の札をいくつかかけるようになった。

「もう帰る？」

僕はもう少し彼女と居たかった。

「星を見に行こうか」



|| || || 公園 || || ||

「星を見るなんて、したことなかった」

「僕もあんまりないよ」

「じゃあ、なんで誘ったの？」

「なんでだろう」

彼女は笑った。

「あ、あれなんだろう？」

光を発しながら飛んでくる、円盤状の物体。

UFOにしか見えない。

どンドン近づいてくる。

僕も彼女ももう声を出すことも忘れてそれを見つめていた。

彼女の上で、それは動きを止めた。

頭の奥がきーんと鳴ってくらくらする。

ソレは彼女に向けて光を放った。

彼女が僕に助けてと言うのが見えた。

耳は未だに聞こえない。

僕はもう無我夢中で砂場のスコップをソレに投げつけた。

それからどうなったのかはわからない。

気づけば彼女が倒れ、ソレがゆっくりと上昇していった。

|||||

結論から言うと、彼女は僕のことだけを忘れてしまっていた。

夏休みが開けると僕の公園に行く頻度も減った。

自然と僕達が会うことはなくなった。

||||| 数年後 |||

「なあおい。今度近くの公園で映画の撮影がワンシーンあるんだってよ。見に行こうぜ」

「おう行く行く！」

あ、お前も行くぞー！」

なんで俺まで……。

高校生とはかくもミーハーな生き物なのか。

「たしか、萩原雪歩ってアイドルが来るらしいぞ」

ああ、彼女か。

そういえば彼女は最近アイドルを始めたらしい。

あれ以来僕達は会っていない。

彼女は会っていたことを覚えてもいない。

不思議なものだ、物静かな彼女がアイドルになるとは。

|||||公園にて|||||

「ハイ、カットオー!!」

「お疲れ様でしたー」

「お疲れ様でしたー」

撮影が終わったらしい。

本当に彼女の演技は素晴らしかった。

「一目だけでも見られないだろうか…」

公園の裏に停めてあるバンの近くに彼女を見つけた。

「プロデューサーさん! きよ、今日はどうでしたか?」

「おう! バツチリだ! やっぱり雪歩はすごいなあ」

「ふふふ、ありがとうございます」

彼女はプロデューサーと呼ばれた眼鏡の青年に恋をしているのだ。

直感的にそう思った。

「ああ、本当に、星を見に行こうかなんて言わなければよかった」

お腹の底から笑いながら呟いた。

S  
F  
記  
憶  
喪  
失  
E  
N  
D